

# コロナ危機に直面する 私たちのウェルビーイング

一橋大学政策フォーラム・ESRI政策フォーラム

2023年2月9日

青山学院大学 教授 亀坂安紀子

# ウェルビーイングの調査研究進展の理論的・実証的背景と課題

- 幸福感や生活満足度などの主観的なデータは“科学的”分析が難しい
- 経済学者が“経済分野”の研究としてデータを分析する場合、従来の経済学の体系を考慮する必要、パネルデータの構築も必要
- 経済学では、個人間で効用を比較することは不可能と考える  
→人々が申告する主観的な幸福度についても、個人間の比較は不可能といった考え方が代表的

# 個人間比較の問題

- Aさんは20代で明るい雰囲気のことが多い
  - 多少嫌なことがあった時でも、いつでも元気に振るまい、普段は自分の幸福度は10点満点と評価
  - 今日は8点と回答
- Bさんは控えめな雰囲気 of 70代
  - いつもは自分は6点と回答
  - 今日は7点と回答

AさんのほうがBさんよりこの日も幸せと考えてよいか？

# 経済学の体系と矛盾のない理論

- Miles Kimball and Robert Willis (2006) “Utility and Happiness” University of Michigan Working Paper
- 個々人の幸福度や生活満足度は、（年次データなどでは）大きな人生イベントがなければあまり変化しない（ベースライン仮説）
- 幸福度などの主観的なデータに関しては、他人との比較が厳密（科学的な手法として）な意味では認められないならば、同一の個人（集団）に同じ質問を繰り返したずねて、その回答データの変化を観測してみよう
- その個人（集団）が様々なニュースやイベントに対してどのように反応するか（例えば、幸福感や生活満足度などが上昇するか）を捉えてみればよい
- そういった形で、他人との比較を行わずに分析すればよい

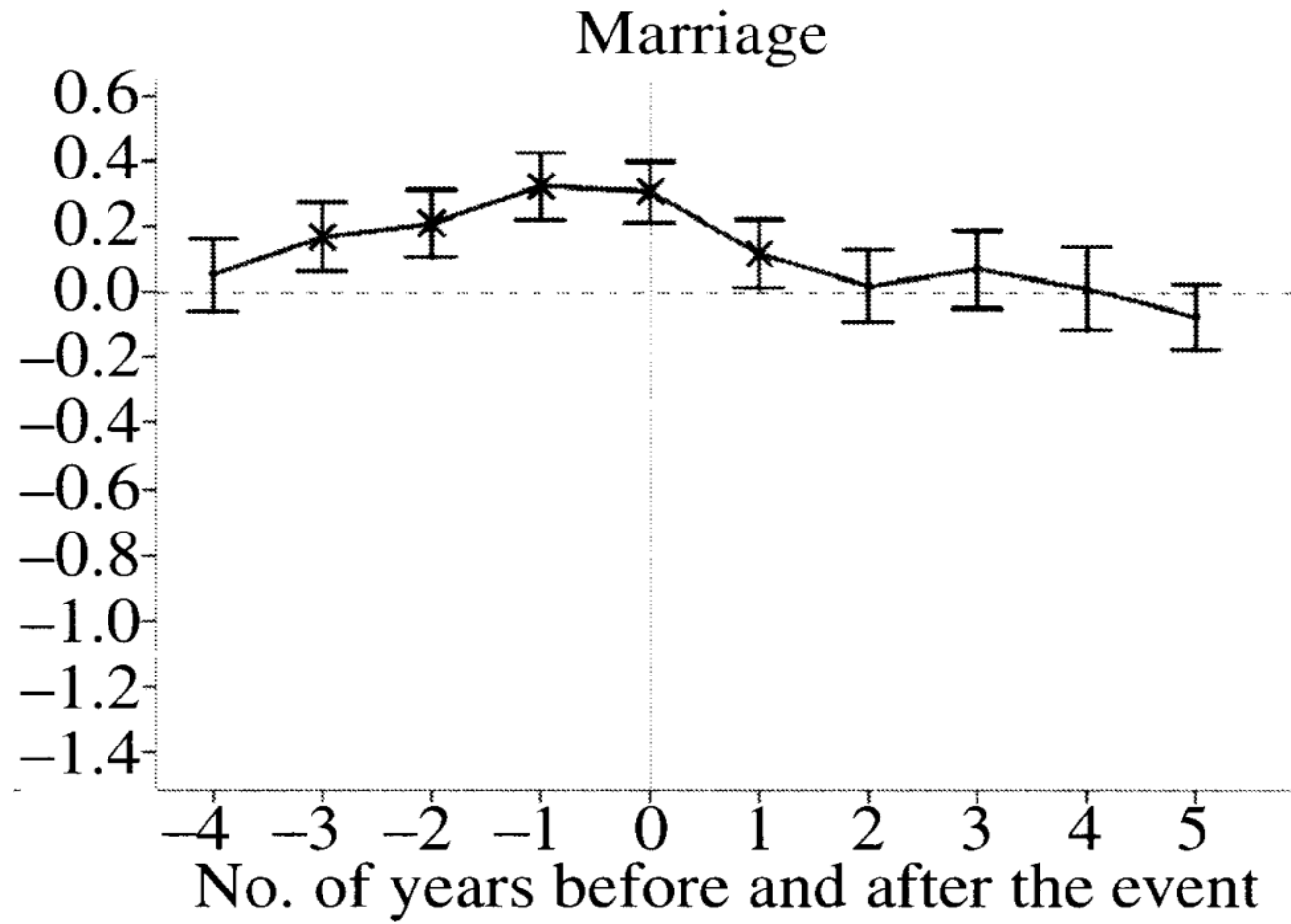
# 計量分析の手法の発達

- パネルデータ：繰り返し観測されるデータ
- 同一個人（集団）に対して繰り返し観測される幸福度などのデータについて、パネル分析の手法を活用すれば、個人間比較の問題を回避できることがある
- 固定効果モデル：観測期間に変わらない個人属性の影響を排除した上で、短期的な幸福度の変化のあり方を分析することが可能

# パネルデータを用いた研究

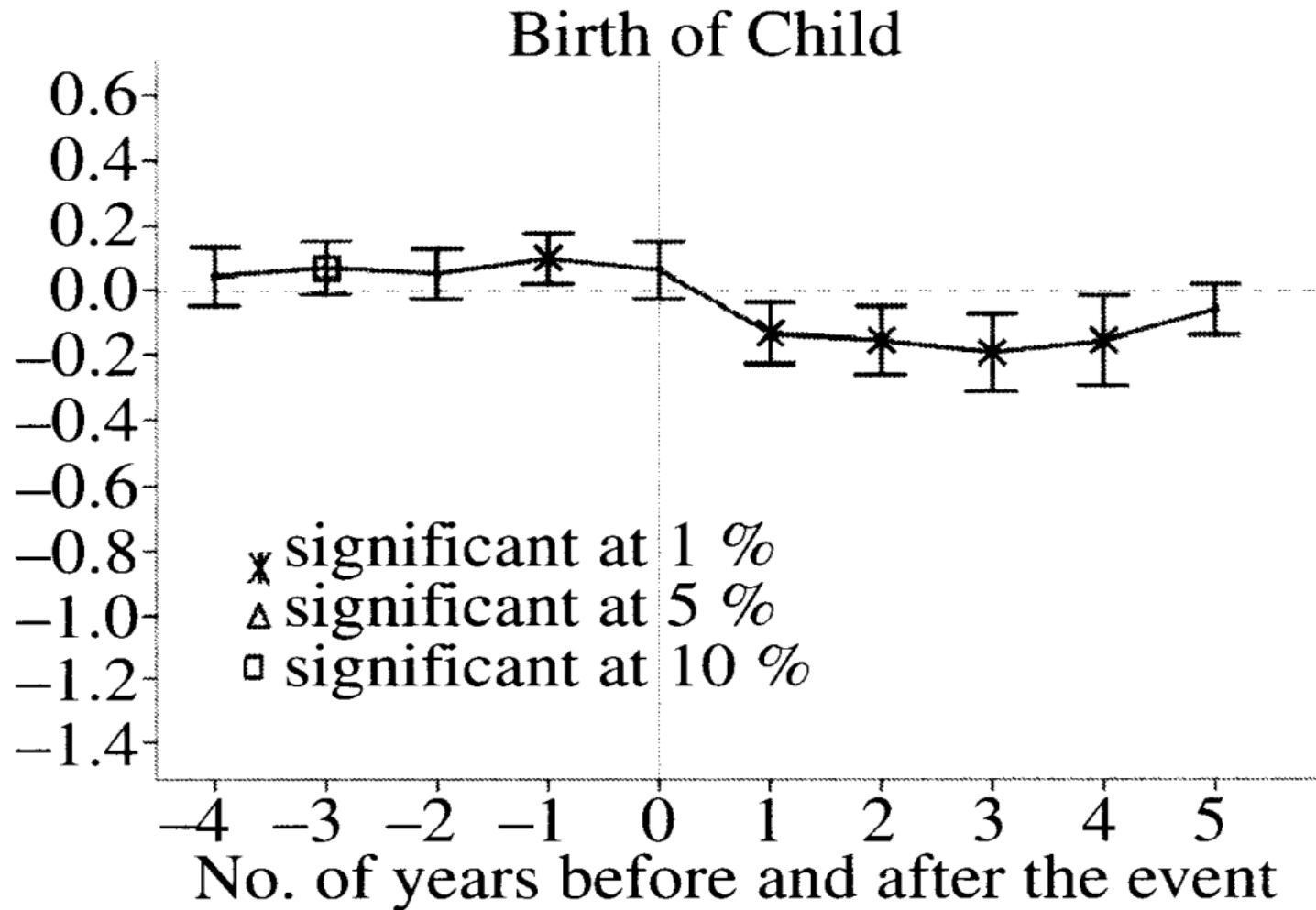
- 西ドイツのデータでは
- 結婚前後の幸福感の上昇の効果はせいぜい数年
- 子供の出生は、幸福度を下げる？
- 離婚・死別などを経験後、多くの場合、数年以内に癒されることが実証的には示されている
- 失業、深刻な病気の影響→ある程度永続的
- 筒井他の研究：個人のニュースは社会のニュースより、かなり強い影響を幸福感に与え、かつ長く続く

## 男性のケース



Lags and Leads in Life Satisfaction: A Test of the Baseline Hypothesis Author(s): Andrew E. Clark, Ed. Diener, Yannis Georgellis and Richard E. Lucas Source: The Economic Journal , June, 2008, Vol. 118, No. 529, Features (June, 2008), pp. F234より引用

## 男性のケース





## 男性のケース



# ただしこれはあくまで旧西ドイツの結果

- 結婚による幸福感の上昇は、より長く続く国も多い
- 離婚前後の幸福感の変化も、その国の制度によって異なる可能性有
- 女性の場合：離婚したいが、生活が苦しくなるので離婚しない→その国の年金システム、養育費の支払いなどの制度次第で、生活満足度や幸福感は変わる可能性
- 男性の場合：日本では、離婚すると親権はほとんどの場合母親、両親に親権が残ると変わる？

# 日本の政策立案に活かしていくには

- 日本の政策に活用するには、日本のデータが本来は必要
- 異なる制度を採用する国の分析結果を参考とする場合は、統計のとり方（設問の設定のしかた）なども、国際標準であったほうが政策や制度の国際比較をしやすい
- 日本は現在、国際標準（OECDの統計に準拠する形の）の生活満足度関連の統計に欠損が多い
- （大きなイベント発生前の）データがなければ、厳密な形では分析できないことも多いので、今後実施される調査に期待している
- 生活満足度関連のデータは、クロス集計などのレベルでも新たにわかることが多い

# コロナ禍でなぜウェルビーイングが注目されるようになったのか

- これまで日本の経済社会が抱えていた問題が、より深刻化している面があると思われる
- 社会的な孤立や精神面への影響
- シングルマザー等の社会的弱者の抱える様々な問題
- 子供の貧困やオンライン授業の提供など学校教育が抱える問題
- 働き方改革や在宅勤務の進め方
- ワーキングプアーや長時間労働の問題

コロナ禍は、弱者や日本が従来から抱えていた問題をより深刻化させている面があると思われることに関連して

小塩隆士先生著 「『幸せ』の決め方」 日本経済新聞出版社の特に第4章「子供は親を選べない」で紹介されている研究結果が特に気になっている。

その章では、子供時代のつらい経験や貧困が、大人になっても様々な面で影響を与えることが示されている。

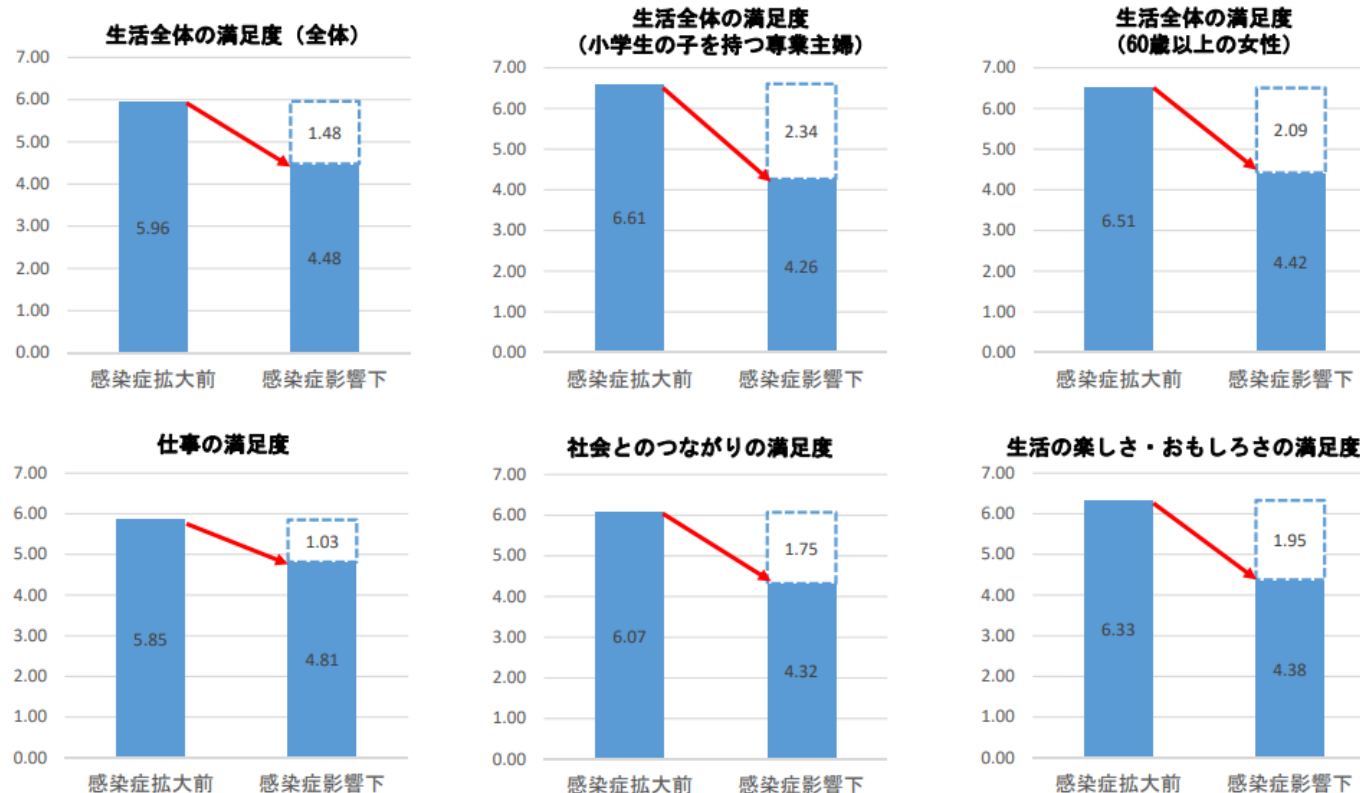
2020年6月21日 内閣府公表資料「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」7頁から引用

<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/shiryo2.pdf>

## 1. (共通) 満足度の変化

○生活満足度は低下。生活の楽しさ・社会とのつながり分野で低下幅が大きい。

質問 「全く満足していない」を0点、「非常に満足している」を10点とすると、①新型コロナ感染症拡大前、②感染症の影響下、それぞれ何点くらいになると思いますか。



2021年12月 内閣府公表報告書「子供の生活状況調査の分析」94頁から引用  
<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/chousa/ro3/pdf-index.html>

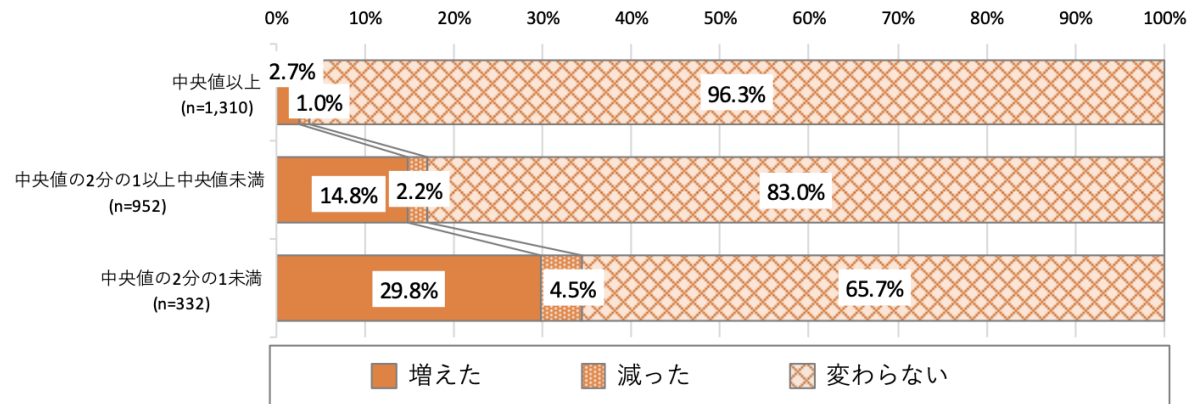


図 2-3-1-8 等価世帯収入の水準別、新型コロナウイルス感染症の拡大により影響を受けたことの内容（お金が足りなくて、必要な食料や衣服を買えないこと）

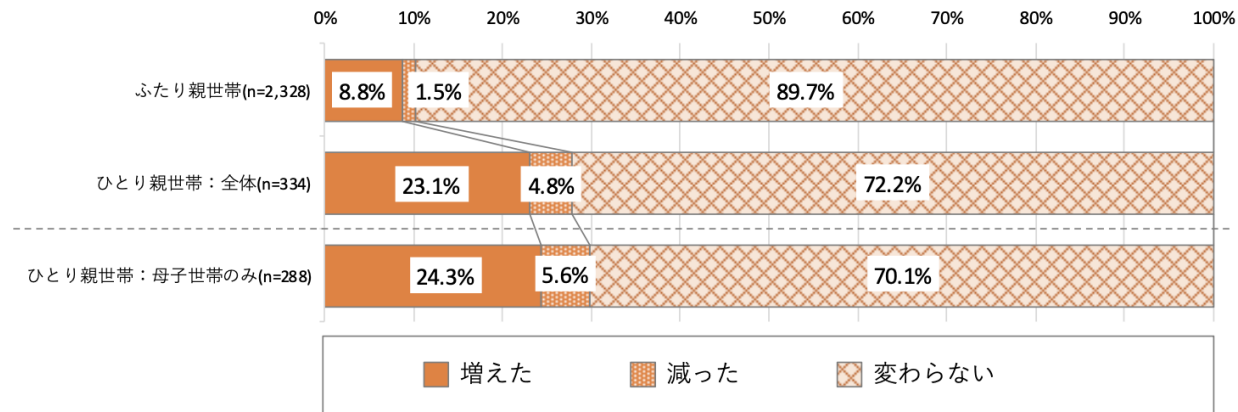


図 2-3-1-9 世帯の状況別、新型コロナウイルス感染症の拡大により影響を受けたことの内容（お金が足りなくて、必要な食料や衣服を買えないこと）

2021年12月 内閣府公表報告書「子供の生活状況調査の分析」97頁から引用  
<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/chousa/ro3/pdf-index.html>

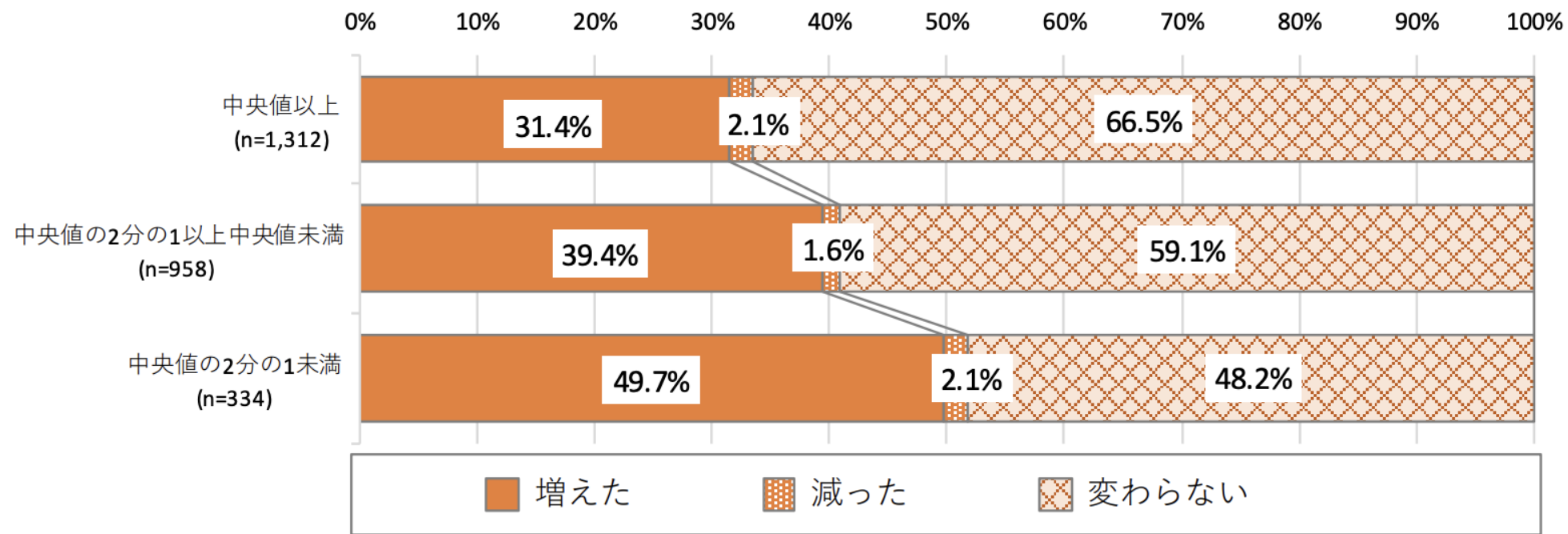


図 2-3-1-17 等価世帯収入の水準別、新型コロナウイルス感染症の拡大により影響を受けたことの内容（あなた自身がイライラや不安を感じたり、気分が沈むこと）



2021年12月 内閣府公表報告書「子供の生活状況調査の分析」98頁から引用  
<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/chousa/ro3/pdf-index.html>

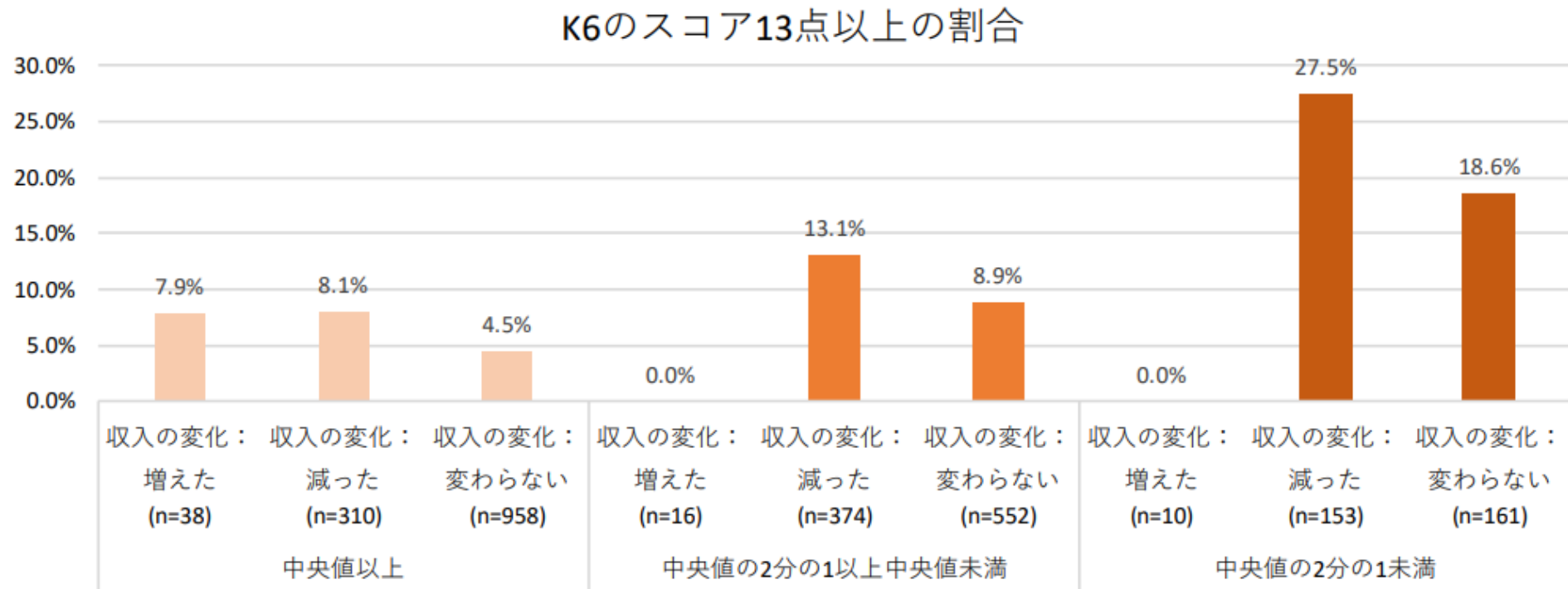
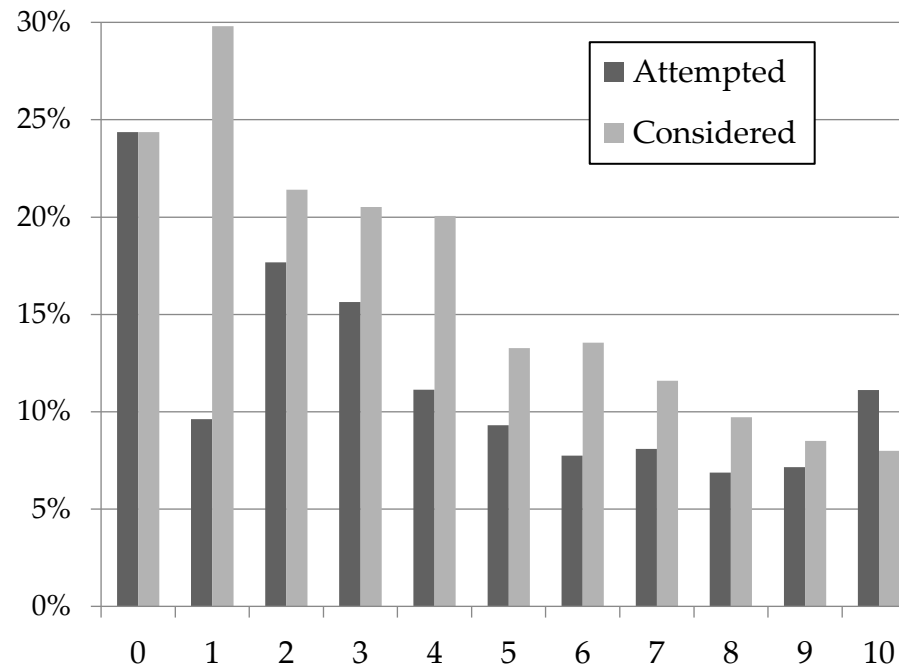


図 2-3-1-20 等価世帯収入の水準別、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響について「世帯全体の収入の変化」の状況別、保護者の心理的な状態（K6 のスコア）

## Accessing Suicidal Ideation from Responses to Queries on Subjective Well-Being, Advances in happiness research : a comparative perspective

Toshiaki Tachibanaki editor (Creative economy / series editors Stephen Hill, Kazuo Nishimura, Tadashi Yagi)  
Springer, 2016, [Chapter 16, Accessing Suicidal Ideation from Responses to Queries on Subjective Well-being](#)  
(Susumu Kuwahara, Teruyuki Tamura, Akiko Kamesaka and Toshiya Murai)

### Suicidal ideation and subjective well-being



亀坂・田村（2016）、内閣府経済社会総合研究所（ESRI） Discussion Paper Series No.325「労働時間と過労死不安」から引用

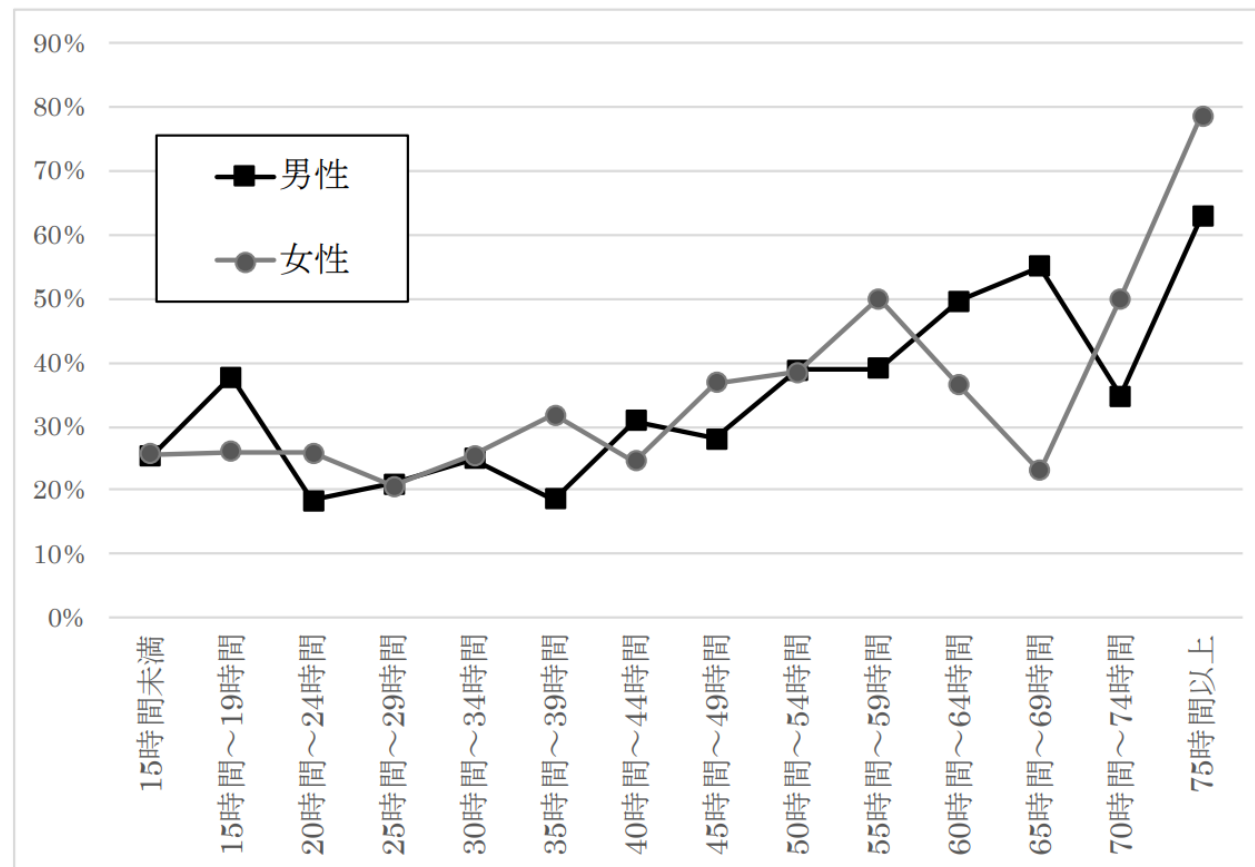
⇒日本では過労死不安を抱えるほど働いている人が多く、リスクリングや学び直しの時間的余裕もない？

表1 男女別「過労死不安」の分布

過労死不安	男性		女性	
	N	%	N	%
5(常に感じる)	210	11.44	167	9.77
4	420	22.88	327	19.12
3	556	30.28	537	31.4
2	438	23.86	452	26.43
1(全く感じない)	212	11.55	227	13.27
合計	1,836	100	1,710	100

亀坂・田村（2016）、内閣府経済社会総合研究所（ESRI） Discussion Paper Series No.325「労働時間と過労死不安」から⇒**長時間労働をしている人ほど過労死不安を抱えている**

図5 労働時間と過労死不安



注) 各労働時間において、過労死不安を「常を感じる」、もしくは「少し感じる」と答えた回答者の割合を示す。サンプルサイズは、男性（1,836名）、女性（1,710名）。

*Education Economics*, 2015

Vol. 23, No. 5, 515–531, <http://dx.doi.org/10.1080/09645292.2015.1042960>



## **Rising aspirations dampen satisfaction**

Andrew E. Clark<sup>a\*</sup>, Akiko Kamesaka<sup>b,c</sup> and Teruyuki Tamura<sup>d\*\*</sup>

*<sup>a</sup>Paris School of Economics-CNRS, Paris, France; <sup>b</sup>School of Business Administration, Aoyama Gakuin University, Tokyo, Japan; <sup>c</sup>Economic and Social Research Institute (ESRI), Cabinet Office, Government of Japan, Tokyo, Japan; <sup>d</sup>Graduate School of Economics, Sophia University, Tokyo, Japan*

# 日本の男性データ 学歴別の理想と実際の幸福度

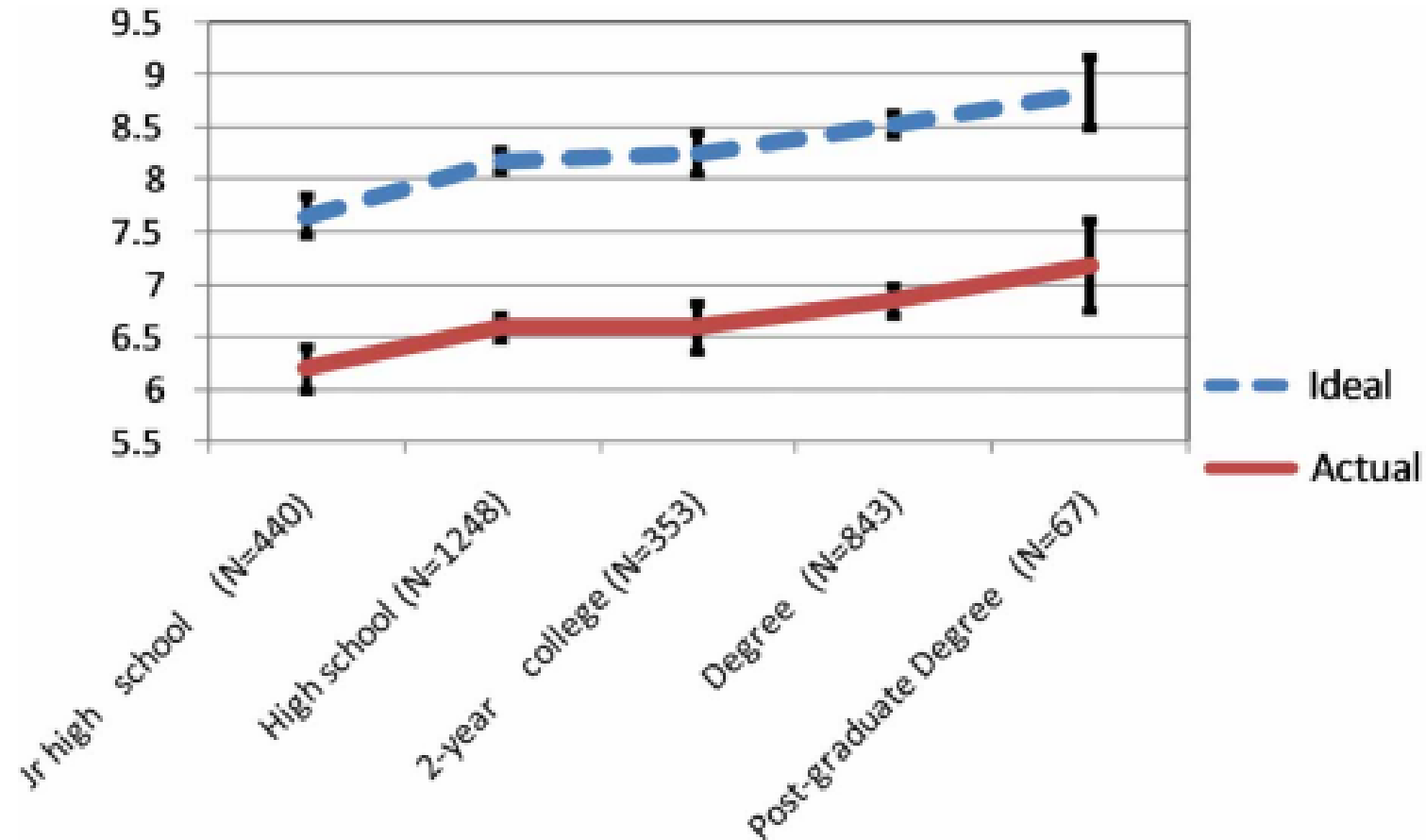


Figure 2. Education and happiness: men.

# 日本の女性データ 学歴別の理想と実際の幸福度

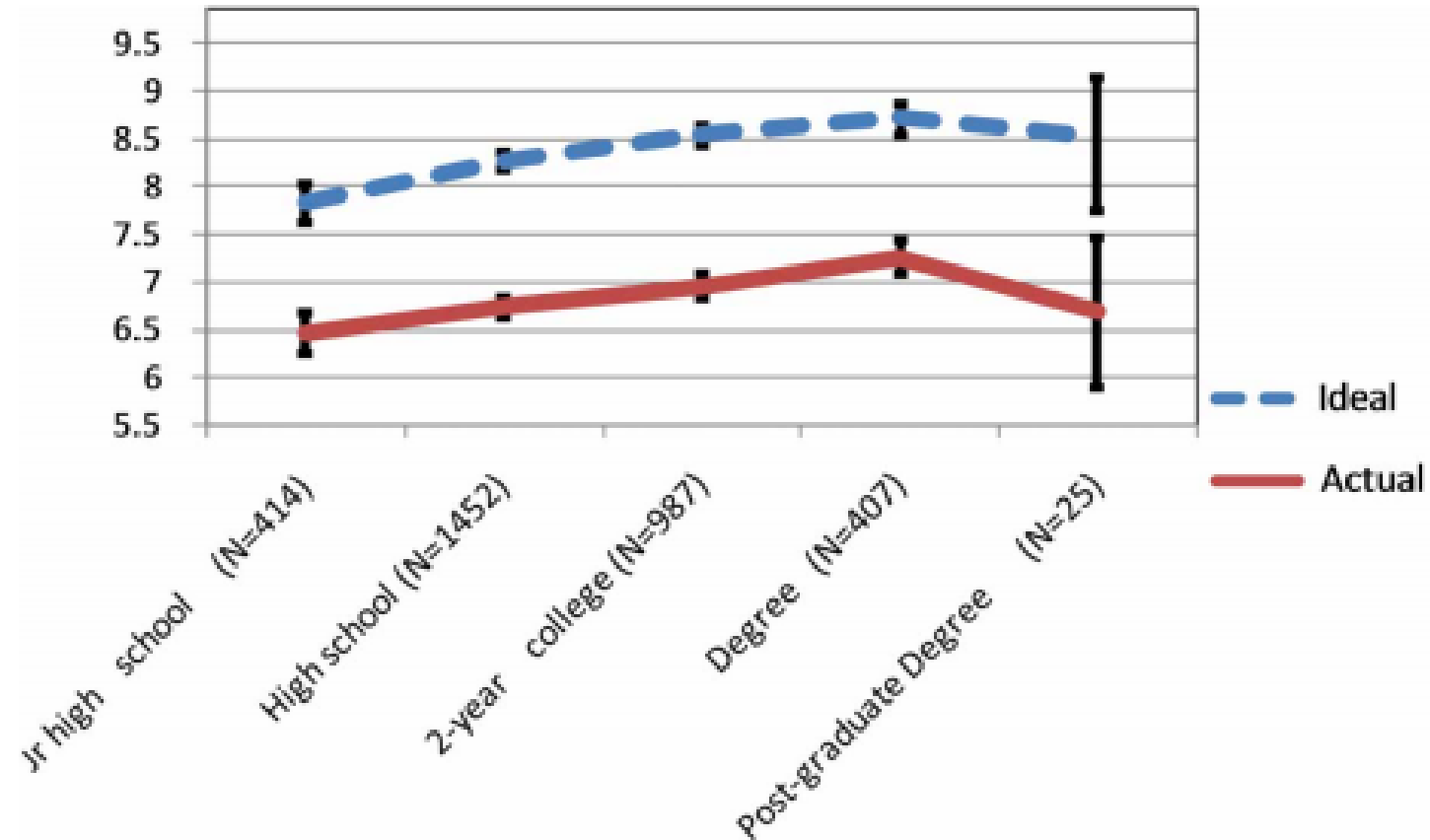


Figure 3. Education and happiness: women.

Note: The vertical bars represent the 95% confidence intervals in both figures.

# ここでご紹介した3つの研究例は、いずれも過去に内閣府が実施した調査データを分析した研究成果

- 過去の研究成果の蓄積から、パンデミック以降、どのようなことが起こりそうか、ある程度予見可能な面がある
- 例えば、人々の幸福度がパンデミックの発生に伴い低下したならば、その時点でメンタル面のケアが次第に重要となってくるであろうことが予想される
- ウェルビーイング関連の調査研究がすすめば、よりタイムリーかつ効率的な政府予算の配分ができる可能性
- 現時点では、日本人のウェルビーイングの分析⇒まだまだ十分には進められていなく、解明されていないことがとても沢山ある
- 実証的研究も、まだまだ試行錯誤を重ねながら進めている状況
- 主観的データを分析できる研究者の育成も必要



# 日本の政策立案に活かしていくには（再掲）

- 日本の政策に活用するには、日本のデータが本来は必要
- 異なる制度を採用する国の分析結果を参考とする場合は、統計のとり方（設問の設定のしかた）なども、国際標準であったほうが政策や制度の国際比較をしやすい
- 日本は現在、国際標準（OECDの統計に準拠する形の）の生活満足度関連の統計に欠損が多い
- （大きなイベント発生前の）データがなければ、厳密には分析できないことも多いので、今後実施される調査に期待している
- 生活満足度関連のデータは、クロス集計などのレベルでも新たにわかることが多い

## 参考文献(一般読者用)

- 1.「人生と幸福度の経済分析」 亀坂安紀子著(日本経済新聞『やさしい経済学』2011年3月8日～17日朝刊連載)
- 2.「幸福の経済学」 亀坂安紀子著(日本評論社『経済セミナー』No.679 P47～52：2014年)
- 3.青山学院大学のHPから、“AGU RESEARCH 亀坂”で検索
- 4.「『国の幸福』を数値で計測 経済学で社会問題を解く」 亀坂安紀子 (日本経済新聞電子版 Global Economics Trends 2022年9月11日朝刊)